

| | |
|---------|-------------------------------------|
| 氏 名 | 大 籠 広 恵 |
| 学位の種類 | 修 士 (看護学) |
| 学位記番号 | 修 士 第 1 1 9 号 |
| 学位授与年月日 | 平成 2 1 年 3 月 2 5 日 |
| 学位論文題目 | 4 ヲ月児を育てる母親の育児困難感と乳児健康診査 問診項目の検討 |

論 文 内 容 要 旨

| | | | |
|---|---------------------------------|---------------|--------------------|
| ※整理番号 | 123 | (ふりがな) 氏 名 | おおごもり ひろえ 大籠 広恵 |
| 修士論文題目 | 4 ヶ月児を育てる母親の育児困難感と乳児健康診査問診項目の検討 | | |
| <p>【研究目的】 4 ヶ月児を育てる母親の育児困難感の程度と、それに影響を与えている要因を明らかにする。さらに、4 ヶ月児健診で使用している母親の心の健康状態を把握する問診項目の有用性を明らかにする。</p> <p>【研究方法】 4 ヶ月児健診を直営で行い、当日の流れが同様である4市において実施した。調査対象者は、2008年8月～9月に実施された、4 ヶ月児健診受診児の母親 523 名にアンケートを配布し、同意が得られた者のうち 303 名を分析対象とした。質問紙の内容は、属性に関する項目、母親の心の健康状態を把握する問診項目 5 項目、健康診査の受診状況、子ども総研式育児支援質問紙（育児支援質問紙）65 項目、エジンバラ産後うつ病質問票 10 項目から構成されている。分析方法は、「育児支援質問紙」の領域 1～5 の各領域の合計点を求め、各領域の合計点との相関を求めた。さらに、領域 1「育児困難感」に、領域 2～5 が与える影響を検討するために、重回帰分析を行った。現在使用されている、問診項目（5 種）の有用性について、「育児支援質問紙」を基本尺度とし χ^2 検定、さらには、感度/特異度や判別分析を用いて検討した。</p> <p>【結果】 育児困難感の程度は、育児困難感が高い（ランク 5、4）の母親は 40.6%であった。また、育児困難感に影響を与えている要因については、5 領域間の相関から、「育児困難感」と「母親の不安や抑うつ傾向」の間に高い相関を示し（$r=0.600$、$p<0.01$）、その「母親の不安や抑うつ傾向」と、「夫の心身の不調」の間に高い相関が見られた（$r=0.424$、$p<0.01$）。重回帰分析の結果では、「育児困難感」には、「母親の不安・抑うつ傾向」において、最も高い値を示した。4 ヶ月児健診において使用している、母親の心の健康状態を把握する問診項目の有用性について分析したところ、χ^2 検定の結果、すべての項目において、有意な関連が見られたが、感度/特異度ともにある程度の値が見られた問診項目は、「育児をしていて疲れたり、いらいらすることが多いですか」感度 56.6%、特異度 74.6%と、「子育てについて困難感を感じることの有無」感度 45.1%、特異度 85.1%の 2 項目であった。判別分析の結果も、この 2 項目が他の項目よりも高い値が見られた。エジンバラ産後うつ病質問票を用いた、母親の育児困難感の推測については、「育児支援質問紙」の 5 領域中、「母親の不安・抑うつ傾向」との間において、高い相関係数（$r=0.700$、$p<0.01$）を示した。</p> <p>【考察】 4 ヶ月児をもつ母親は、育児困難感のレベルとして、介入の優先度は高くないが、全体的に、育児困難感を有する割合が多く、その育児困難感には、母親の不安や抑うつ傾向が影響する。さらに、母親の不安や抑うつ傾向には、母親自身のことのみではなく、夫の状況も大きく影響する。「育児支援質問紙」で介入が必要と判定された母親は、健診で使用している問診項目でネガティブな回答をしているということが明らかになった。しかし、介入が必要な母親すべてを抽出できていないということに、検討の余地がみられた。育児困難感をもつ母親を的確に把握するためには、母親自身に関する問診項目を再検討することが必要である。今回、エジンバラ産後うつ病質問票の結果は、「育児困難感」に影響を与える「母親の不安・抑うつ傾向」と関連性が高かったという結果から、エジンバラ産後うつ病質問票を用いて、母親の育児困難感の推測が可能であると考えられる。</p> <p>【総括】 今回、4 ヶ月児を育てる母親の育児困難感の状況を調査したところ、この時期の育児困難感には、子どもの成長や発達に関することよりも、母親としての自信が大きく影響していた。また、母親の心の状況には、夫の心身の状況が関係していた。母親の育児不安への支援を目指した健診にするためには、従来の、「子どもを通して母親を見る」という視点ではなく、母親の状況、夫の状況を聴き取ることから、介入の必要性を把握することが望ましいと考える。介入が必要な母親を漏れなく抽出するためには、問診項目として設け、標準化することが必要である。今回は、4 ヶ月児健診を対象とした結果を得たが、今後、その他の健診時期の、母親の育児困難感について明らかにしていくことが必要であり、その時期に応じた、母親支援につながる問診項目を検討していくことが課題である。</p> | | | |

(備考) 1. 研究の目的・方法・結果・考察・総括の順に記載すること。(1200 字程度)

2. ※印の欄には記入しないこと。